

月刊 みんなねっと

8
2025



カボチャ

特集 統合失調症の早期介入と
その実践の広がり



公益社団法人 全国精神保健福祉会

家族ほっこりまると支援を目指して

精神保健福祉の 未来を描く

みんな
ねっと



第17回全国精神保健福祉家族大会in京都

みんなねっと京都大会

日時

2025年9月6日(土)

場所

京都テルサ

京都市南区東九条下殿田町70

主催

(公社)全国精神保健福祉会連合会(みんなねっと)

(公社)京都精神保健福祉推進家族会連合会(京家連)

後援
(予定)

内閣府・厚生労働省・京都府・京都市・(一社)京都精神科病院協会・京都精神神経科診療所協会
京都精神保健福祉士協会・(一社)京都府身体障害団体連合会・(社福)京都府社会福祉協議会 他

もくじ

2025年 8月号 通巻第221号

2 みんなのわ——読者のページ

6

特集



統合失調症の早期介入とその実践の広がり

内野敬、岡本浩二、佐野美貴

14 多事彩々 学びの面白さ 野村忠良

16 みんなねっと相談室から《第76回》

ストーカー被害 誰も対応してくれないことへの不満

18 子ども・きょうだい・配偶者 家族いろいろ(その63)

家族会で安心を 息子とよい距離を

20 リレー連載「リカバリーをめぐる、対話のように」⑨

内なる不安を支援の仕事に活かす～社会との接面で抗うこと～ (対話) 岸田耕二・岩谷潤

24 知りたい！聴きたい！こんなとりくみ(第52回)

県と市の家族会の協同で「再出発」を実現～新潟市精神保健福祉家族会

28 フレー！フレー！これからの家族会 第28回 牛久精神保健福祉会
「ぬくもりの会」(茨城県)

30 マンガ ラジオ 鳥さなぎ

32 お知らせします みんなねっとの活動

〈表紙絵〉藤子(群馬県)

〈メッセージ〉煮物にすると最高

読者のページ

みんなの

わ

「みんなのわ」は、読者のみなさんからの便りや投稿を中心に紹介するコーナーです。

「みんなねっと」の感想

◆大阪府 心矢魅縁 家族（50代）

家族会の例会で「月刊みんなねっと」をいただきました。他の地域の家族会の紹介やフォーラムの抜粋記事、社会福祉法人団体のとりくみなど、障害者をやさしく取り巻く人々の声が集

まっていた。この冊子を初めて目にして、その内容に魅かれ、食い入るように読みました。心が温かくなるのを感じました。

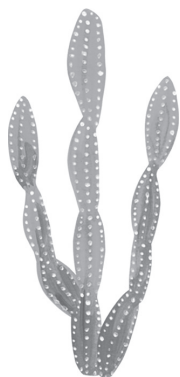
私には発達障害の特性がある、30歳と26歳の2人の娘がいます。現在グループホームへ入り、B型作業所へ通う長女は、福祉サービスにつながる前は、母子して迷走の日々でした。仕事ができず、家へこもるようになり、心療内科へ助けを求めました。でも長女は診察に前向きではなかった。医師が症状を聞いてもまったく話そうとはしませんでした。すべてを拒否しました。

医院をコロコロ変えるたびに

長女にくだされる病名は変わりました。そのため長女は余計に医師を信頼しなくなっていました。

そんな苦しい中の生活でありましたが、なぜか私は外へ助けを求めることができませんでした。10年以上前は、発達障害の認知も今ほどではなかったです。福祉サービスも充実していませんでした。

でも実際は、そのこと以上に私と娘が諦めた気持ちになっていたのです。第三者の介入がな





くひきこもり続けた結果、母子が共依存状態に陥り、私は長女から召使いのような扱いを受け、抵抗するとお構いなく暴れて要望を押し通す暴挙につながってしまいました。

そんな反省から長女と離れて暮らしている現在、作業所の職員、ホームの担当の方に間に入っていたき、ワンクッションがあるおかげで長女が一人で苦勞せず、助けが必要な際は、その方々から私に連絡が入る、

冷静かつスムーズに問題解決に向かう流れができました。

介護と同じで、家族だけでなくとか面倒を見ようと思いがちになりますが、公的な福祉サービスなど、第三者に入っていたくのは本当に大切なことだと実感しています。

家族間だけの対応では、当事者も支える家族も甘えが入り、自立への道が遠のくこともあります。今は前より家族会や自助会などの数も増えています。同じような状況下で悩んでいる方は、ぜひ外部に助けを求めて密すぎる家族間の関係に風穴を開けて解決策を探っていただきたいと思います。

日常生活

◆埼玉県 内野達矢 家族（60代）

家族2人が当事者です。母は統合失調症で幻覚幻聴に悩まされながら78歳で逝去、弟も統合失調症で50歳過ぎましたが、精神病院に入院しています。

母が亡くなるのは悲しいことでしたが、死は長年の症状から解放されることを意味し、おつかれ様と声をかけました。

一方弟は、父に暴力をふるい、警察のお世話で入院した経緯があります。今でも面会に行っても訳のわからないことをぶつぶつ言って、とても一緒に住める

状態ではありません。

入院前も町内をぶつぶつ言いながら歩き回り、ご近所から迷惑だ、薄気味悪いと、父がつるし上げにあっていました。そんな様子を目の当たりにしてきたので、今後なにも事件を起こさないとは言い切れず、とても退院させることはできません。

父は何十年も戦ってきましたが、今や90歳、今後は私が引き受けなくてはなりません。入院費も馬鹿にならず、足元を見るかのように、強引に差額ベッドの室料を取る病院。そして地域で精神障害者を支える仕組みもなく、解消されない偏見、孤立する家族……21世紀になっても何も変わっていません。これが

残酷な現実です。

◆茨城県 ひーぽ 本人 私を変えた母の日記

自宅療養していた頃、不安が強かったので、父と母と私の3人、川の字で寝ていました。

ある日、目を覚ますと父と母の姿はなく、母の枕元に日記が置いてありました。私は母の日記に手を伸ばし日記を読みました。日記には母の心中が吐露とろされていました。

病気の娘を見ているのはつらいとか老後はのんびり旅行でもしたかったとか延々とそんなことが書いてありました。私は『なんだ!! お母さん自分の事ばかり!!』と怒りすら湧いてきま

した。しかし、読み進めていくうちに『大変だ!! このままじゃお母さんの事を不幸にしちゃう!!』と思ったのです。その時から私は変わりました。お母さんのことを不幸にしない様になるべく自分が笑って過ごせる様に心がけました。それから家事などの家の手伝いを作業療法と思って一生懸命やる様にしました。

あれから17年経ち、私は結婚することができました。父も母も元気で過ごしています。あの時自分が変わって母を不幸にではなくて本当に良かったです。

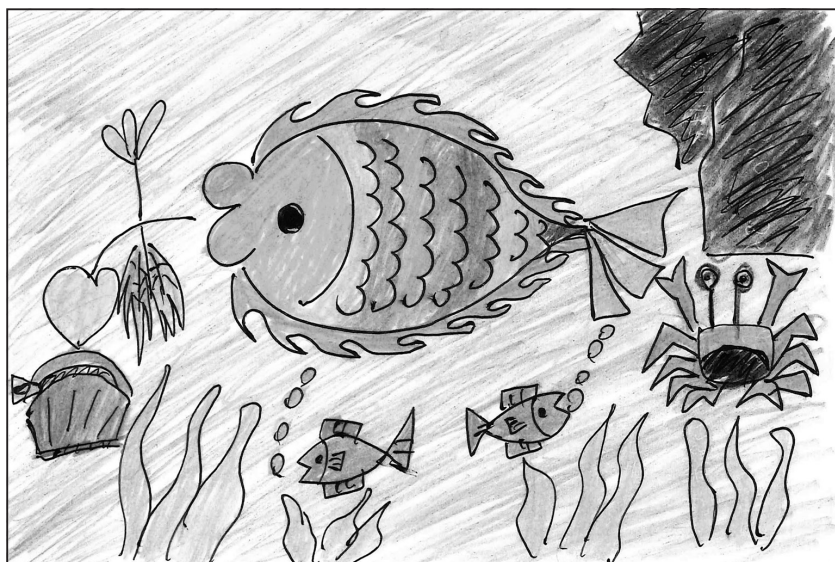
◆愛知県 小川洋輝 本人（60代）

最近、お米の価格が高騰して

家計のやりくりに困っている。去年と比べると5キロ4000円を超えている。2倍以上の価格である。訪問介護のヘルパーさんや訪問看護の看護師さんとはよく共通の話題となる。私は統合失調症で、障害年金二級を支給されているので、食費を切り詰めれば今のところはなんとかやっていけるが、ヘルパーさんから「ご飯からめん類（うどんきしめん、ラーメンなど）食パン、サンドイッチに切り替えている利用者さんも多いですよ」とか「実家が農業をやっているお米20キロを無料で送っていただいています」との話を聞くにつれ、なるほどとかうらやましいなあをつくづく感じる。

備蓄米が十分に行き渡っていないのであろうと思うが、せめて3000円半ばに価格が落ち着くことを心から願っている。

全国の子ども食堂では米の寄付が減少して運営に支障をきたしているらしいが、それに比べるとまだ状況はベターなのかと思う今日この頃である。皆さんどう対応していますか？



◆熊本県 白竜 本人（40代）イラスト

特集

統合失調症の早期介入と その実践の広がり

地域で行う若者に向けた早期相談支援

東邦大学医学部

社会実装精神医学講座

内野敬

統合失調症の早期介入

1980年代より、統合失調症に対して早期発見・早期治療を行うことで、その後の症状や社会生活などの予後が改善されるということがわかってきました。他の身体疾患と同様に、精

神疾患も脳の病気と考えれば、当然のことかもしれません。統合失調症の早期介入に関して重要となる指標や概念として、「精神病未治療期間 (Duration of Untreated Psychosis : DUP)」と、「治療臨界期 (critical period)」というものがあります。



内野敬さん

す。DUPとは、幻覚や妄想など明らかな陽性症状に示される精神病状態が始まった時点から最初の治療開始までの期間とされています。すなわち、治療開始までのタイムラグを表す指標です。また、統合失調症の発症初期、特に発症後2～5年の間の治療の結果が、長期の予後に関連することがわかり、この期

間は治療臨界期と呼ばれます。DUPを短くすること、すなわち発症後早期に治療を開始することは、治療臨界期の間に早期の介入へとつながります。しかし、DUPの長さは世界的に極めて深刻であり、統合失調症を発症しても、適切な治療の開始までには長いタイムラグが生じ



ることが示されています。日本で行われた調査でも、DUPの平均値は21か月とされ、1年半から2年近いということが報告されています。この背景には、精神科の受診に対する偏見・ステイグマや、統合失調症は症状の自覚を持ちにくい病気であることなど、さまざまな要因が挙げられています。

1990年代には、統合失調症を発病前のリスク状態を特定する試みが行われるようになりました。具体的には、At-Risk Mental State (ARMS^{アールムズ})と呼ばれています。ARMSにはいくつかのタイプがありますが、代表的なものとして、診断水準ほど顕著ではないものの、微弱

な幻聴や妄想などの陽性症状を認める状態があります。ARMSの基準を満たす人は、一般若年人口の1・7%、精神医療サービス利用中の若年者の19・2%と報告されており、稀とはいえ難しい頻度で認められます。しかし、リスク状態を呈したとしても、必ずしも明らかな発病に至るわけではないことはわかっています。累積発症率は3年間で20〜30%が上限となり、以降は頭打ちになるとされています。

ただし、微弱な陽性症状を認める時点で既に、脳には微細な変化が現れていることや、心理的苦痛やQOLの低下、さらには就学や就労などの生活場面での困難を伴っていることも多く



あります。統合失調症を発症しなかった場合も、これらが持続することは少なくありません。そのため、微弱だから放っておいてよいわけではなく、これらのサインを見逃さず、早期の段階から適切な対応が必要になります。近年、これらの背景を基にした早期介入サービスとして、病院の中で行うものだけでなく、地域に専門の相談窓口

を設置する試みが世界的に進んでいます。そこでは、微弱な陽性症状に限らず、精神疾患の好発年齢層である若者を対象として、抑うつ、不安、ストレスに伴う心理的苦痛などメンタルヘルス全般に対する支援が行われています。

国内における若者に向けた ワンストップ相談窓口の実装

2019年より開始した厚生労働科学研究費補助金による「MEICIS^{メイスィス}」プロジェクト（研究代表者 東邦大学 根本隆洋）では、わが国の代表的な地域特性を表すモデルエリアを設定し、これに対応した精神保健・早期相談支援のあり方に

についての検討や具体的なサービスの実装を行いました。その分担研究の一つ（研究分担者 厚生協会東京足立病院 田中邦明）として、若者に特化した窓口「ワンストップ相談センター^{ソッド} SODA（現：あだち若者サポートテラスSODA）」を東京都足立区に開設しました。名称は、Support with One-stop care on Demand for Adolescents and young adults の頭文字から付けられました。現在までにSODAのとくくみは、埼玉県川口市、北海道札幌市に広がり、開設や運営に際しては各地域の実情を踏まえた実践が行われています。

窓口のサービスモデルとして



「こころサポートステーションSODAかわぐち」
2022年より大型ショッピングモール内の常設窓口として開設

は、ワンストップ・ケアの理念に基づき、地域におけるハブとなる「よろず相談所」を設置し、「どのような内容の相談で

も受けつけ、適切な支援や治療につなぐ」ことを設定しました。具体的には、まず、若者がアクセスしやすい繁華街の近く

やショッピングモールの中に窓口を設置し、相談することを身構えずに済むような堅苦しくない雰囲気作りを心がけています。例えば、窓口内のインテリアに若者の意見を取り入れ、来談者が持ち寄った趣味の作品を展示したり、SNSで発信したりするなど、若者たちが主体的に参加できる場と

して、協働で作り上げていくことも重要です。そのうえで、メンタルヘルスの不調に限らず、学校、家庭、職場など多様な生活場面での困難や課題を、どのような内容でもワンストップで幅広く、無料で受けつけています。そして、概ね6か月間を支援期間と設定し、精神科医師、精神保健福祉士、公認心理師、看護師等の多職種チームで支援にあたり、担当となったケースマネジャーを中心に相談者に伴走しています。内容としては、生物・心理・社会モデルに基づく包括的フオーミュレーションと臨床型ケースマネジメントを提供し、抱えている悩みや困難の解決に向けた具体的な支援を

行いつつ、相談者の希望に応じて、医療機関をはじめ教育、福祉、就労等の各種専門機関への橋渡しを行っています。

若者の相談支援で

大切になっていること

SODAでは、専門職のチームとして悩みや困難の解決に向けた支援を行うと同時に、地域の身近な伴走者として寄り添うことで、揺らいでいる自己肯定感・効力感の向上をめざすことに重きをおいています。まずは、援助希求をしたという大きな一歩を支持し、その悩みに寄り添い、受容することがとても大切です。そのうえで、解決に向けた次の一歩を、第三者と一緒に

考えるという体験を積んでもらいたいと考えています。同時に、家族の方からも、安心して任せてもらえるような存在として、エビデンスに基づく相談支援を行い、説明責任を果たすことが重要であると考えています。

実践を続ける中で、来談した若者がその後、自身のきょうだいや友人が困りごとを抱えた際に「話に行ってみたら」と援助希求を促し、本窓口へ新たに來談する若者が増えています。過去に自身が援助希求をした経験を踏まえ、ピアのゲートキーパーとして成長した若者の姿を頼もしく思うと同時に、思春期・青年期における「相談」の重要性を再認識します。この時

期に「他者に相談をしてよかった」と思えた経験は、この先続く成長の過程で非常に重要な意味を持つと思います。

SODAの柱となる機能として、精神医療への橋渡しとその後の連携が挙げられます。精神科医師を含む多職種チームがこれを地域で行うことが、本窓口の強みです。来談者が初めての精神科受診に不安を抱えていたり、抵抗感があることは珍しくありません。精神症状と同時に生活場面でのさまざまな困りごとを抱えており、「何からどのようにに伝えたらよいかわからない」ということも多くあります。また、医療機関で提供できるところと、本人・家族のニーズが

マッチしないということもあります。そのため本窓口では一般的な健康相談の枠組みとして、医療機関の紹介に加えて、初診の前に精神科受診の目的を明確化することや、聞き取った経過を書面等で医療機関へ情報提供するなど、相談者の希望に応じて支援をしています。受診後も治療方針を確認し、それに沿った心理教育や環境調整などの心理社会的支援や、次回診察時に担当医へ伝える内容を整理するなど、通院定着に向けた支援を行っています。このように、未受診の方や受診後もない時期の方に対しては特に、スムーズな精神医療へのアクセスを支援しています。

おわりに

本窓口のとりくみは、地域におけるさまざまな保健医療福祉サービスの入り口として機能し、適切なサービスが必要な時に利用することを促進することで、限りある社会資源の有効活用につながると考えています。現在、東邦大学医学部社会実装精神医学講座では、SODAのとりくみをモデルとして、早期相談支援に関わる人材育成や窓口開設のコンサルティング支援等を行っています。今後、若者に向けた専門窓口のあり方について検討を重ね、さらなる効果的な実装と普及により、多くの方々に還元できるよう尽力した

いと思います。

謝辞

本とりくみにつきまして、多大なるご指導とご支援をいただきました根本隆洋先生をはじめ、関係諸機関の皆様に厚く御礼申し上げます。



川口市の早期相談支援のとりくみ

川口市保健所 岡本浩二・佐野美貴

川口市の状況

川口市は埼玉県南端に位置する、人口60万人余りの中核市です。市保健所は、2018年4月の中核市移行に伴い設置されました。疾病対策課精神保健係（保健師7名、精神保健福祉士3名、事務1名）の主な業務は、電話や訪問等による精神保健福祉相談、家族支援事業、普及啓発事業、自殺予防対策事業、精神障害者訪問支援強化事業

（アウトリーチ事業）、若年者早期相談・支援事業などです。

予防的支援を意識したとりくみについて

精神保健相談の緊急事例の多くが若年期に何かしらのメンタルヘルス課題を抱えており、重症化した後に保健所に繋がっているということに気づきました。「もっと早い段階で何とかならなかったか……」「重症化する前に防げなかったか……」と感



岡本浩二さんと佐野美貴さん（右）

じることが多く、重症化を予防する相談支援体制の必要性を感じました。若年者の支援は専門性が高く（困り事の複雑さ、複合化等）、既存の支援や資源では対応できないことが多く、相談を受ける職員にも戸惑いがありました。また、相談は家族や関係機関からが多く、本人からの相談は殆どありませんでした。「保

健所に相談する」ことは、若年者にとってハードルが高いと考え、若年者が気軽に症状や生活課題が深刻化する前に、「違和感」の段階で支援できる予防的な早期相談支援の必要性を一層強く感じるようになりました。

「こころサポートステーション SODAかわぐち」の設置と実績について

このような中で、東京都足立区における「早期介入に関する実践」を行っていた「SODA^{ソニーダ}」の活動を知りました。市が目指す施策と合致したため、市の事業として相談窓口を設置するための準備を進め、2022年6月30日にイオンモール川口前川

に「こころサポートステーション SODAかわぐち」を開設しました。

昨年度の実績は、利用者数302人、支援述べ件数は1911件で、新規利用者（206人）の4割が10代の相談となっています。予約の待機期間が長期化したことから、今年度から週の開所日を1日増やしました。保健所とSODAで月に1回モニタリング会議を実施し、事例の共有を図り、保健所の地区担当とSODA職員でその都度連携し対応を検討しています。関係機関への周知活動や個別事例を通して、関係機関との「顔の見える関係性」を構築し連携も深めています。

成果と今後について

保健所には繋がらなかったような相談が、SODAには相談ができていたという点では、市が目指す予防的な介入窓口として機能していると考えています。今年度から開所日数を週4日から5日に増やして対応していますが、SODAでの対応には限りがあります。地域全体のメンタルヘルスリテラシーを高めるためのとりくみを行うことが、保健所に求められる役割であると認識しています。関係機関向けの研修会や市民向けの「こころサポーター養成研修」の開催を通じて、メンタルヘルスに関する理解を深めるとりくみを続けていきます。



学びの面白さ

新しいことを知ると、風景が違って見えてくる。空も星も木々も小鳥も、街や自宅も。そして自分の身体さえも。ありふれたものが、生き生きとした魅力あるものになってしまう。

見^み栄^ぼえのしない野良猫と、たびたび接して心が通い合うようになると、誰よりも親しい親友に変わるのと似ている。いつも心の中にいて、自分の世界の一部になるのだ。

知れば知るほど、自分という存在が周りに溶け込み広がっていく。自他と時空の境界線がぼやけて、どこまでが自分か分からなくなる。すべてが自分、と思えるほどに、何もかもが大切に親しい存在に思えてくる。周りがあつてこそ、自分が存在していただけることが、身に染みて分かってくる。



困るのは、自分につながるすべての命あるものたちが、幸福であってほしいと願うのに、知れば知るほど、実は悲惨な状況にあり、大切な命が次々に消えていつているのが見えてくることである。自分の身体が侵されていくようでつらい。

それなのに、なぜ学び続けるのかというと、もっと深く知れば、生身の感覚を超えた新しい境地に行き着くと感じるからである。そこでは、生死や愛が、今とは違って見えそうだ。

実は、その真相の面影を、私たちはみんな、心のどこかで知っていて、幼い子が、見えない母を慕^{した}って探し回るように、求め続けているのではないか。

学びは、本当に奥が深くて面白い。

（野村忠良）

《第76回》

ストーカー被害
誰も対応してくれない
ことへの不満

みんなねっと電話相談
毎週水曜日 10時～15時
03-5941-6346



◆相談者の質問

この女性（40代・統合失調症）はこの数年、3、4か月に1度、電話をかけてこられます。

お悩みの内容は一貫して、いますが直近では、

「住んで3年目のアパートにも以前居住した時と同じストーカーの一団が来て悪質な妨害を続ける」「そのせいで睡眠もとれないし留守中に部屋に入り荒らされたり盗まれたりするので外出もできない」「警察に届けでも信じてくれないし、この被害とたまる恨みをどこに訴えたらよいのでしょうか？」ということでした。

◆訴えが通じないことで強まる不満

初めての電話の時は、人間関係が起因して実際に起こっているのかもしれない……と、彼女の苦しい現状を伺い対応したただけで過ぎた気がします。

しかし2回、3回と内容も辛さもアップする相談を重ねて、やはり相談者の「症状の成せる業」であることがはっきりしてきました。

しかし「それはあり得ないことですよ」とか「症状からくるものでは？」等は相談員としては禁句です。とにかく「ストーカー騒動」での悩みを相談員に話してくださることは大事ですよ」と伝えると同時に、その恐

怖や困惑する心境は私にも想像できることをお話しました。

◆話しあったこと

電話の度に傾聴を繰り返していると、相談員として少しでも解決を！と焦る心境が出てきます。

「妨害するストーカーの侵入は、貴女の脳が疲れていると特にひどいのでは？」と伺ってみると「そう言われればそうかもしれない。熟睡できないからいつも疲れているし……」との返事。

『統合失調症』と診断されていると教えてくれたけど、病気で疲れている脳の調子を整えるために、「薬」を考えてみませんか？ 薬の助けを借りて妨害が

減る可能性もあるのでは？ 妨害が減ってきたら貴女にエネルギーが溜まり、行動範囲も広げられるかもしれないし、うまくいけば、ストーカーも姿をみせなくなると思うのですが……」

こんなやりとりの後に彼女は薬や通院についての経験を語ってくれました。

「10年前、診断で処方された薬を飲み始めました。副作用がきつくて医師に相談したけれど、何ら考慮してもらえず、間もなく薬も通院もやめました。パートナーと同棲して何とか生きてます」

話し方もしつかりされているし、長い間、薬なしで過ごされていることは幸いです。しかし症状が高じて社会一般に向けてま

で不満が増加している現在の彼女に、改めての医療を！加えて心理的に的確に対応してくれる地域支援と繋がるのが急務と感じました。それが叶えば、今の状況から抜け出せて、彼女の「統合失調症」と共に生きる日々がより穏やかなものになるのではないか……と思いました。

◆相談員の思い

それからまた2か月がたっています。彼女が、お知らせした保健所に出向きクリニックや地域の支援者と出会えたかは不明です。いつか「ストーカーの被害が少なくなりました！」のお声が聴けたら……と、時々思い出しています。

（島本禎子）

子ども・きょうだい・配偶者
家族いろいろ
その63

家族会で安心を
息子とよい距離を

岐阜県 青山（仮名）

突然の病名

私の息子は統合失調症で40代です。小さい頃は理数が好きで、親と離れ専門学校卒業後、1年間仕事をし、その後、ひきこもりしました。知りあいに相談したり、いろいろ勧めたりしましたが、なかなか変化はなく、数年

が過ぎました。その後アルバイトを行い、急に「正規職員になる」と言い出し、喜んでいいのか？ 不安を覚えました。そして、奇妙な行動し、即、入院となりました。

精神の病気!! 統合失調!! 10年近いひきこもりを、社会的ひきこもりと信じ、病気を少しも疑いませんでした。

家族会に入会

その頃、私は退職した後で時間的余裕があり、毎日図書館に通い、統合失調症の本を読みあさりしました。そして、友人に相談し、すぐ家族会に入会しました。初めて例会に参加し不安を話すと、皆さん聞いてくださり

同じような当事者の実例も出してくれました。とても安心したのを覚えています。

家族会役員に

まず、地域家族会の役員会に入れてもらい、例会や精神疾患の講演会によく参加しました。例会では「家族の対応の仕方」などを学び、心強く感じました。会員の近況報告も参考になることが多かったです。

今は、県の家族会・岐阜県精神保健福祉会連合会（ぎふかれん）の役員になり、電話相談もしております。

「ぎふかれん」では、年3回の講演会、相談事業（電話・面談・メール・訪問）、「家族によ

る家族学習会」などを実施しています。講演会事業と相談事業は、岐阜県の委託事業で、県の支援を受けています。新聞社には、毎週、電話相談の小さな案内を新聞紙面に掲載してもらっています。

今年の甲州・東海ブロック家族大会は、岐阜県が担当で、事務仕事が多くて大変ですが、会員・役員は、自分の特技を活かし、空いた時間を見つけ、事務所に来て、皆でがんばっています。

息子を見守る

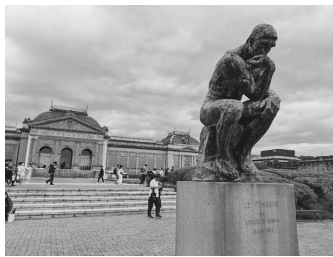
息子は、いろいろな波がありました。1回目の入院は、幻聴・妄想が強く半年と長かったです。しかし、退院後は、B型作

業所に行き明るくなりました。

2回目の入院は、親に対する要求・押しつけが強く出て、警察に相談し、入院となりました。3回目の入院は、自宅の改築で、一人暮らしをした事が原因とされています。不安で寂しかったのでしょうか、自傷行為をしました。

今は何も興味がなくなり、家にひきこもっています。普段は夕方、おやつを買うため10分間ほど外出するだけです。受診、

床屋、手帳等の更新の手続きは、自分で行きます。訪問看護の看護師さんにも「はい」「い



京都の美術館

いえ」の返事ぐらいです。聞いても、なかなか話してくれませんが、訪問時間が増えることを期待しています。今は、心身を休める時期と思って、じーと見守っています。息子が楽しいことを見つけ出すのを待っています。

趣味

私は役員で忙しいので、息子に「一六時に帰って来る」と伝えて家を出ます。役員と話していると、すっかり息子のことは忘れていきます。

趣味は絵手紙を描くことです。最近、美術館にも行きました。

内なる不安を支援の仕事に活かす ～社会との接面で抗うこと～

(対話) 岸田耕二・岩谷潤

《対話者のプロフィール》

岸田耕二 きただちうじ 鳥取県出身。精神保健福祉士として神戸で社会福祉法人すいせい^{あらが}の立ち上げメンバーとして働きたす。20年前から就労支援に力を入れ、現在は障がいに限らずに引きこもりなどの支援も行っている。

岩谷潤 いわたじゅん 一般社団法人COMETIC共同代表・あちこちシネマ主宰。

本当に望むことを 理解するのがプロ

岩谷 ご活動について教えてください。

岸田 社会福祉法人すいせいの理事をやっています。入職当初は40～50代の統合失調症の方が中心の作業所からで、接して

ると教科書での情報とは違っていて、しっかりした方、高学歴の方もいらした。でも当時はまだまだ偏見が強くて、ハローワークでも「この人は統合失調症だから働けない」と言われるし本人さんもそう思っている。僕も若かったので引かかって、利用者さんに「本当に働かなくていいんですか？」と聞くと「いいんだよ」。そこでもう一つ質問して「もし今のあなたを雇いたいという会社があつたら、それでも働きたくないんですか」と。利用者さん20人に聞くと、18人が「そんな会社ないけど、もしあつたら働きたい」と答えたんです。口では「働かなくていい」と言ってるし、支援者の業界で

も「働けない人のニーズに対して」いい居場所を作ってあげるのが僕らの役割だよね」という風潮だった。でもそれは本当のニーズではなくて、本当は「そんな会社があったら働きたい」だったんですね。

岩谷 一人ひとりに時間をかけて聞かれていたと思います。自信を失っていて「俺これでいいんだよ」と言う以上語りたくもないし想像したくもない、という気持ちは自然ですよ。

岸田 何もわかってない新人だから話してくれたのかもしれない。ただ、若い頃から思っているのは、相手



岸田耕二さん

の人の「どうせこれぐらいだろう」という想像を超えて、本当に望んでいることを理解するのが大事だと。支援者がこれいいでしょうってものを提供しているのは、こっちの自己満足で、クライエントの満足ではない。

岩谷 個人として「納得がいかない」から動く。大切な「プロ意識」だと感じます。

人は変わることができる

岸田 入職3年目に製菓工場の中で訓練する場所ができたんです。当時は精神疾患の人はライオン作業ができないと言われていたのです。すごい人数でシフトを細かく組んで始めたんですけど、蓋を開けてみたらその3分

の1ぐらいの人数でできる。みなさん長時間働けるし、体調もどんどんよくなっていく。精神の人の場合は、ストレス管理、体調が悪くなったら早く見つける、本人が早く自覚できるようにして、病気が発動しないよう予防する方法がわかれば長く働けると思いました。それから、本人が工夫した時や成長した時にタイミングよくその話をする、と自信がついていく。人間っていくつになっても行動を変えられることに勇気づけられました。

岩谷 精神医学では症状だけでなくその人そのものと言うものの、家庭での症状とのつきあい方、仕事を通じての症状とのつきあい方を実際に見れるもの

ではなかなかありませ
ん。実際に
働く中で、



岩谷潤さん

自身で調子を測っていく力、それから失った自信をしっかりと育んでいけるような関わりはとても大切だと思います。

岸田 お薬の大切さもわかってきました。例えばお昼寝しちゃって夜眠れないのにお医者さんに「夜眠れないんです」って言っちゃったり。そこをちゃんと伝えましょう、と言ったりして、お医者さんの見立てだけじゃなくて、クライエントさんの受診する力、問診を受ける力を上げると、かなりよくなると実感できた。

脳の働きを学んで実践に活かす

岸田 その頃から、発達障害の方も就労が難しい、精神の人とはまたつまづき方が違うと世の中で言われ始めました。見え方や聞こえ方が違うというのを学習障害の専門家から聞いて、他の人でも脳の動き方が違うかもしれないと思って、右利きの人はどういう時に脳のどこが動くという局在論を学びました。あるお医者さんが問診で子どもの頃の遊びを聞いていたんです。大人になると、発達の特徴からきているのか、統合失調症の後遺症なのかかわかりにくいのが、それを聞くとわかると。そこで、8歳までの時の遊びを含

めた16個ぐらいのことを聞くメソッドをつくりました。それ以上の年齢になると自分のしたいことよりも周りの目を気にするので8歳までで。すると、脳のここが動きやすい、能力的にできやすいこと、どういう仕事に向いている、とわかってきて、発達の人のが就労もどんどんできるようになったので、今はひきこもりや大学生支援や児童養護とか働きづらい人の支援にも活用しています。

社会に抗える

「感情を触る」仕事へ

岩谷 岸田さんご自身の出発点はどうなものでしたんですか？

岸田 元々中学生の頃に不安感

が強く、将来は社会がどのように変化していくのだろう、というのがありました。勉強していい企業に勤めたら幸せだよというレールを周囲からは言われるんですが、60歳になってそういう仕事があるのかなと感じていて。ロボットにはできない、感情に関わる仕事だけは残るんじゃないかと考えていました。

高校の卒業前に進路を決めないといけないけど、社会に納得がない。高校を出たら仕事をしたい、感情を触る仕事をしてあげば、ニーズも高まり十分に食っていける仕事になるはずと言っと、親から資格を取りなさい、という落とし所になった。精神保健福祉士のグローバル定

義を見ると「社会的マイノリティの人のために社会変革をするのがソーシャルワーク」と書いてあって、表立って社会に抗えるいい資格だと（笑）。

岩谷 今やっと、「生きづらさ」が誰にでもある、そして障害の有無を超える発想も増えてきました。誰にだってマイノリティなところがあるからこそ、マジョリティをめざして動く人も多いように思います。若い頃のそのような源流と、今の意識では変化がありますか？

岸田 いろいろ考えられる人がこんなに不安になる社会ってどうなんだ、という思いは今でもあります。ひきこもりの方って、皆さんとても優秀で考える能力

も高いのに、考えられるから一歩が出しづらいいし、不安に気づいちやう。そんな人たちがひきこもってしまう社会に対する反骨心がいまだに減らないのが、活動を続ける一つのエネルギーですね。

岩谷 感受性も高く、しかもご自分でしっかりと考えられる方が多いですよ。不安って、人によって重さ、大きさ、出てくるタイミングは違いますが、社会との関わりを減らすこともあれば、逆に増やす、あるいは形づくってくれることもあるんです。今日はありがとうございました。ぼく自身も生きていく上での不安を大事にしたいと思います。

知りたい！ 聴きたい！ こんなとくみ

第52回

県と市の家族会の

協同で「再出発」を実現

「新潟市精神保健福祉家族会

新潟市精神保健福祉家族会

代表 小林 清一さん

新潟県精神保健福祉家族会連合会

理事長 星 真人さん

副理事長 池野 宏子さん

副理事長 坪谷 一舟さん

理事 吉井ミチ子さん

事務局 奥村利佳子さん

今年の4月に、新潟県精神保

健福祉家族会連合会（以下、県

連）の事務局の方から連絡があ

り「解散してしまっていた新潟

市家族会が発足することにな

り、どんな風に進めたらよいだ

ろうか」とご相談いただきました

た。数年前、何度か新潟市の家

族会である「新潟市精神障害者

地域家族会」（以下、前家族会

には、家族相談員研修会や勉強

会などでお邪魔させていただい

ていたことに加え、県内でも比

較的会員数の多い印象だった家

族会です。解散したことを知っ

たときは大変驚きましたが、県

連の役員のみなさまが「新潟市

の家族会を復活させたい」とい

う思いを持っていたことは昨年

の県連訪問で伺っていたので、

「ついにその時が来た！」とい

う気持ちで大変嬉しかったのを

覚えています。

そこで今回は、新たに「新潟

市精神保健福祉家族会」（以下、

市家族会）として再出発を迎え

られた市家族会の歩みについて

取材してきました。

突然の解散、一通の手紙で知る

前家族会の解散は50名ほどこい

た会員に、一通の手紙が郵送さ

れるという形で伝えられました

た。もともとコロナ禍がきつ

かで活動が休止状態だった前家

族会。手紙には細かい理由は書かれていませんでした。後々、前会長がご自身の体調不良により家族会活動を続けることができないと判断され、お一人ですべてを清算されたそうです。残念ながら県連本部には相談や連絡はなく、粛々と進められたよう。やむにやまれぬ決断だったのでしょうか。2023年のことでした。

「思いが一緒だからつながった

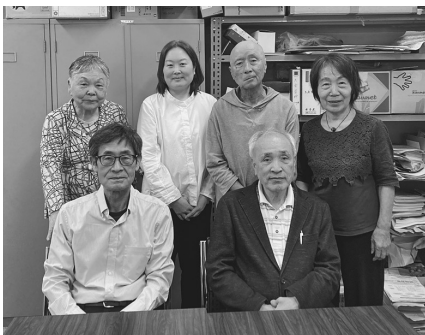
県連役員のみなさんは、前家族会解散後、どうにかして復活させたいという思いを持っていました。しかし、県連には単会の会員名簿もなく、誰にどのよう>Contactを取ったらいい

かわかりません。そんな時、役員の知りあいの家族会の方が、前家族会の研修会に参加された経験から、「連絡を取るなら、小林さんが適任だと思う」と進言されたそうです。そこで、県連理事長である星さんが小林さんに電話で連絡し、家族会の必要性などについてお話しされ、家族会復活への協力を求めました。

小林さんというのは、もともと前家族会の会員で、家族会に入られて10年ほどの方です。これまではお仕事もされていたため、奥様の方が家族会活動に積極的に参加されていたのと。突然、県連理事長からの電話を受け、さぞ驚かれたのではないかと思います。小林さんはおつ

しゃいます。「星さんから電話をもらった時、思いが一緒だったんです。私も（家族会を）何とかしたいと思っていたし、特に（精神疾患の）発症当初はつながる必要があると思っていて、星さんと同じ気持ちでした」。

一方、星さんもこのようにおっしゃいます。「初めて小林



市家族会代表の小林さん（手前左）と
新潟県連役員・事務局のみなさん

さんと電話で話しましたが、すぐに私の言いたいことが伝わった気がしました。小林さんがいてくれて本当によかったです。このお二人をつないでくれた方の先見の明も素晴らしいですが、『家族会は必要だ』という信念を持っておられるお二人だからこそ、つながるべくしてつながったのだと感じました。

設立準備は協同で

さて、ここからは新たに市家族会が発足するための準備に入ります。まずは、3月下旬の設立総会の開催です。これまでは小林さんも一会員でしかなかったため、個人的に知っている数人の会員さんの連絡先しかわか

りません。その方々に新たな家族会発足に向け声をかけましたが、高齢を理由に参加はできないといわれてしまいます。

ここで県連の出番です！県連事務局に相談に

来られた方などに声をかけ、市家族会への参加を呼びかけました。星さんいわく「3人集まれば家族会はできますよ」。結果11名が集まりました。県連のバックアップが功を奏したといえます。

また、この設立総会を新潟の新聞社（新潟日報社）が取材にきてくれました。市家族会が県内に宣伝され、翌4月には15名ほどの会員数になりました。新

新潟日報
今日の天気
掲載のご案内
メニュー

自立への不安、地域での差別…
悩み分かち合って 新潟市で精神障害者家族会が再結成、月1回集い語る

2025/3/31 11:00


拡大する

「新潟市精神保健福祉家族会」の設立総会。精神障害者の家族が互いに思いを語り合った＝3月29日、新潟市江南区亀田向陽1

↑
精神障害者の家族が集う「新潟市精神保健福祉家族会」が4月1日、設立される。これまでの家族会が昨年解散し、必要性を感じた有志が新たに会員を集めて再結成した。代表に就任した小林清一さん（70）＝新潟市東

聞の効果は絶大ですね。それと同時に、やはり家族会を求めている方は多いということが明らかになったといえるのではないのでしょうか。

悩みはあるけれど

この度、小林さんは市家族会の代表としてその任を担ってくださることになりました。小林さんは「誰かがやらなきゃいけないから」とおっしゃいます。

家族会では役員のなり手がいないことが各地で悩みの大きな種になっていきますので、この発言

は生意気ながら大変頼もしく感じます。しかし、当然悩みがあります。それは、運営費と行政とのつながりがいいことです。

立ち上がったばかりなので運営費が十分ありません。助成金を申請したいと思っても、実績がないという理由で難しいそうです。「まずは身近な支援者にPRして、徐々に広げていきましようよ」「市にもあいさつに行った方がいいね」と県連役員さんたちのアドバイス。県内のさまざまな支援関係者の名前が口々に挙がりました。顔を知ってもらおうことで市家族会のPR

と協力者の獲得につながりそうです。

家族会の立ち上げにはいろいろと負担も多いと思いますが、小林さんをはじめ、みなさんの表情は明るく、「大丈夫、みんなで協力すれば何とかなる!」という雰囲気を感じました。

家族会として一体となって

最後に県連役員の方と小林さんから今後についての思いをお聞きました。印象的だったのは、「家族会の運営の仕方として、役割分担をし、みんなで会の問題を話しあいましょう」、「一緒に考えて、一緒に悩むことが大事」、「楽しいことが7割、勉強が3割」といった言葉にみなさん

も私もうなずくばかりでした。また「光明が見えてきた」とおっしゃる役員さんもありました。みなさんが市家族会の再出発を心から応援し、温かく見守ろうという気持ちが続きました。

実は取材当日に県連の総会が行われ、星さんから県連の理事長が交代となり、小林さんが就任されました。市家族会と県連との二刀流ですが、役員や事務局、家族会のみなさんの協力があれば大丈夫。そして何と云っても小林さんの穏和で真面目なお人柄が人をひき寄せるのだと思います。今後の新潟に大きな期待を寄せて、みんなねつとも共に歩みたいと思います。

(取材・事務局 高村裕子)

牛久精神保健福祉会「ぬくもりの会」

「一人で悩まないで」～支えあい・学びあい・働きかけ～



◎各地でがんばっている家族会活動の紹介

佐藤正臣（茨城県）

会の成り立ち・発足について

1995年から2001年までは、ボランティアの方々が「ひまわりの会」として、精神障害者支援を行ってきましたが、ボランティアの方と家族に温度差があり、2001年に龍ヶ崎保健所の励ましもあって、龍ヶ崎地方精神障害者後援会「たつの会」が発足し、2007年には、つくば、竜ヶ崎、牛久の家族会で社会福祉法人「ゆっこら」を設立しました。

4つの支部家族会は市町村の単位家族会として、牛久市・取手市・利根町・龍ヶ崎市の順に独立していきました。

当家族会は「ほっとぴあ牛久

の会」と称し、2001年5月に発会しました。2009年には名称を「ぬくもりの会」に変更して現在に至っています。会員数は26名、賛助会員11名です。

主な活動

8月を除いて毎月第3土曜日の13時30分から定例会を開催しています。毎回8～15名が参加しています。

テーマは毎月内容を変え、NHK福祉ビデオやみんなねっと大会DVDの視聴・親なきあとについての学習会・専門家による講演会・会員同士でのおやつ作り・施設見学会等を行っています。特に「親なきあと」の生活・相続・遺言、終活については

会報は「ぬくもり通信」を年5回発行しています。内容は総会、定例会の内容や報告、その他会員から投稿された原稿の紹

当会は牛久市障害者連合会に加盟しており、他の障害者団体と共に、障害者の共生社会つくりのために尽力しています。毎年10月には牛久市に対して障害者連合会として、要望書を提出しています。

[illegible]

ホームページは、「牛久ぬく
もりの会」で検索できます。

ラジオ

鳥さなぎ

テレビの
バライデー番組を
見ていると

ムッ!?
私に向かって笑ってるわ
バカにしているのか?

ニュース番組を
見ていると

気分が暗くなる内容が
多いなあ…

音楽番組は

うわっ!
まぶしい
酔った…

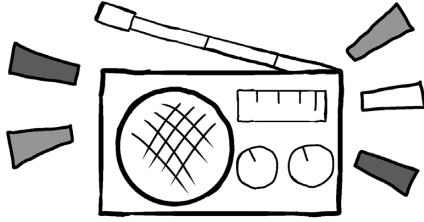
キャー!!

ギャハハゲラゲラ

タタタタドン

ジャンジャカジャン

テレビが嫌いになっ
てしまったので



ラジオに
切り替え！

鳥さなぎ 『防災時だけでなく、ラジオはいつでも楽しめます。時々投稿もします。』

朝のニュース
チェックラジ
オ

ニ
ュ
ー
ス
を
お
知
ら
せ
し
ま
す



昼の音楽聴き流し
BGMラジオ



夜の
猫の鳴き声
が
怖いので
ラジオ



ラジオアプリを外出先で
聞くほどハマっています



情報量も視覚情報が
無いので半分くらい減る
聴き流せるから
楽なんだよね

お知らせします みんなねつとの活動

■みんなねつと定期総会開催

令和7年6月6日、公益社団法人全国精神保健福祉会連合会（みんなねつと）定期総会が東京都障害者福祉会館で開催されました。

出席者は正会員の都道府県代表者46名（委任状含）及び法人理事、監事、顧問3名の計57名。午後1時から始まった総会は3時間半にわたり活発で熱心な審議と意見交換等が行われました。以下その概要を報告いたします。

■総会における4議案説明の概略について

第1号議案令和6年度事業報告及び第2号議案令和6年度決算報告は副理事長が説明。

事業は、みんなねつとの三つの基本構想（「提言」実現、組織強化と活性化、みんなねつとの存在意義の追求）を基本に活動してきた。各種の調査、家族学習会、相談更に提言実現、中期計画、JR運賃等の委員会活動を実施した。また賛助会員の減少傾向については次年度以降継続する課題とした。**決算**については、最終損益はマイナス160万円。収益では助成金がゼロで前年度対比マイナス190万円になったことが大きく影響した。費用に

については固定費の割合が大きい傾向が続いている。この対策として

は健全な寄付収益を増やす方向を求めたい。

採決の結果、第1号・第2号議案は賛成多数で承認されました。

第3号議案令和7年度事業計画及び第4号議案令和7年度予算は理事長が説明。

事業計画の基本方針は、「提言の実現」「財政基盤の強化」「ニーズに応じた事業展開」「機関連携と発信力向上」とした。そのために「提言実現には、各



種委員会の強化、具体的な行動計画を、また財政基盤強化は賛助会員拡大、収入確保の検討、事務局の効率化等を計画。更に家族二ーズの把握、体験の集積、学習会、相互支援、研修等、関係機関との連携、広報活動等としている。予算については、最終損益は収支均衡予算とした。収益では、助成金及び賛助会員収入が増加の48百万円。費用については固定費比率は高いが緊縮経費もあり収入同額とした。

採決の結果、第3号・第4号議案は賛成多数で承認されました。

■総会における正会員からの意見、要望等の概要について
意見、要望等は次のようでした。

た。

○会計の仕組み、処理等全般について

「年に1回の機会では、十分な理解や把握が難しい」
「寄付金に頼っている経営で

大丈夫か。非常に心配している」
「主な勘定科目の増減について説明が欲しい」

○現在のみんなねつとがとりくむべき課題を整理して欲しい
○厚生労働省の630調査を利用しているか

○全国会長会議をオンラインで実現して欲しい

○全国大会、ブロック大会はライブ配信をしてほしい。

○みんなねつとからいろいろな情報を流して欲しい。

○家族会の生の声を運営に反映させることを願いたい。

○全国の家族会の状況が抜けている。どうとりくむかが無い。

○議案書のまとめ方がわかりにくい。

○総会資料をもっと早く欲しい。皆で検討したいから。

○交通運賃問題は3障害一緒に対応すべき。

会員の皆様がみんなねつとへの期待を感じさせてくれる機会であり要望、意見等でした。あわせて日頃からのコミュニケーションの大切さを再認識する総会でもありました。

顧問からの現実的な提言と警鐘

総会には顧問弁護士と顧問税理士も同席し、それぞれの立場

から現実的な視点を交えた助言が寄せられました。

「赤字運営は福祉分野のNPOに共通する課題だが、今こそ支出の見直しと収入源の多様化が必要」とし、会費・寄付・助成金のバランス、さらには機関誌発行や事務所のあり方についても再考を促しました。「今は奇跡的に寄付が得られているが、これを機に体制を立て直すべき」との助言には、出席者の多くが深くうなづく様子が見られました。

「法的整合性と社会的信頼を両立させるためにも、会員との信頼関係をベースにした意思決定が重要」とし「紙媒体の発行や交通費など、従来の慣習にとら

われず、世代交代と時代にあった柔軟な運営が求められている」との意見が述べられました。

■2025年度JDF代表者会議

6月23日のJDF代表者会議に岡田理事長が出席しました。昨年度事業報告・決算、今年度事業計画・予算が審議されました。特に、新規入会等の希望の精神当事者団体2つについては、最終的に両団体ともオプザバーとして参加することで合意しました。また、国連障害者権利委員の自己負担支援や能登半島支援の延長も決定。さらに、みんなねつとからはJR交通運賃割引の100km制限撤廃に向けたとりくみを一緒にこなつ

ていく呼びかけもしました。

■リモート版家族学習会 担当者養成研修会開催

6月22日に家族学習会担当者養成研修会をリモートにて開催しました。20名の参加者が全国から集まり、中には海外からの参加者もありました。

本研修会は「家族による家族学習会」を運営・実施する「担当者」を養成するための研修会です。参加者からは「いろいろな視点の話が聞けた」「リーダーの重要性を痛感した」などの感想がありました。次回は、来年2月頃を予定しています。ホームページや各県連を通じてご案内いたします。

編集後記

編集後記

■この暑さに、「夕涼み」の言葉が生きていた幼い頃のことか思い出されます。一杯入っていたであろうゆかた姿の父に付いて、妹と三人で散歩に出、舗装していない道を下駄をガラガラさせ歩くと、「鶏のように歩け」と父の声。鶏のように？と音をたてぬよう妹と歩いたものです。星空の下の懐かしい一コマです。(吉邑)

■読者の皆さまからの、「誌面が役立った」というお声や、ご自身の生活や体験と重ねたコメントを拝見すると、ていねいに読んで下さっている様子が伝わってきて、大変うれしくはげみになります。インターネットで何でも検索できる時代ではございますが、手に取ってじっくり読める雑誌のよさをお伝えできるよう、引き続きがんばってまいります。(本山)

【交流サイトを開設】インターネット上で、家族同士が交流できるサイト「みんなねっとサロン」を開設しました。withコロナの時代の新しい家族会活動の一つです。パソコンだけでなく、スマートフォンでも見やすくなっています。下記にアクセスしてください。<https://minnanet-salon.net/>



月刊 **みんなねっと** 通巻第 221 号(2025年 8 月号)

定価 300 円

発行日 2025 年 8 月 1 日

発行者 公益社団法人全国精神保健福祉会連合会

理事長 岡田久実子

〒 167-0054 東京都杉並区松庵 3 丁目 13 番 12 号

TEL03-5941-6345 FAX03-5941-6347

ホームページ www.seishinhoken.jp

郵便振替 00130-0-338317 加入者名 みんなねっと

賛助会費 (会費に購読料含む)

個別・年間 3600 円

複数・年間 (お問い合わせください)

印刷・製本/倉敷印刷株式会社

表紙のデザイン/いりす

A 4に拡大してご利用ください。宿泊希望ホテル番号はホームページ等で確認ください。

申し込み先＝東武トワツアーズ（株） 京都支店

FAX 075-341-1878

第17回全国精神保健福祉家族大会「みんなねっと京都大会」

大会参加・宿泊・レイベント・弁当等申込書

申込み締切日 令和7年7月31日（木）

枚目 計 枚

複数枚の場合ご記入下さい

大会参加登録及び旅行手配のために必要な範囲内での大会事務局、運送、宿泊機関、保険会社等への個人情報提供について同意の上、以下のとおり申し込みます。

都道府県	所属団体 グループ名	〒 -	申込書 参加者氏名 参加団体名 登録送付先 自宅TEL 携帯TEL メールアドレス FAX番号	受付日						
住所	〒	性別	参加種別	参加方法	希望分科会	レイベント	弁当	9月5日(金)	9月6日(土)	同席希望者名
※郵便番号は正確にご記入ください	性別	年齢	参加種別	参加方法	希望分科会	レイベント	弁当	9月5日(金)	9月6日(土)	同席希望者名
※郵送交付が当務者の場合 送付先を記入してください	性別	年齢	参加種別	参加方法	希望分科会	レイベント	弁当	9月5日(金)	9月6日(土)	同席希望者名

No	フリガナ 参加者氏名	性別 年齢	参加種別	参加方法	希望分科会				フレイベント		宿 泊				同席希望者名	
					第1希望	第2希望	第3希望	第4希望	9月5日		第1希望	第2希望	第1希望	第2希望		
									1部	2部						
例	キヨフ ト 京都 太郎	男 女 50歳	家族 関係機関 当事者 学生	現地 フーカイブ	②	①	③	④	○	○	○	1	2	1	2	
1		男 女 歳	家族 関係機関 当事者 学生	現地 フーカイブ												
2		男 女 歳	家族 関係機関 当事者 学生	現地 フーカイブ												
3		男 女 歳	家族 関係機関 当事者 学生	現地 フーカイブ												
4		男 女 歳	家族 関係機関 当事者 学生	現地 フーカイブ												
5		男 女 歳	家族 関係機関 当事者 学生	現地 フーカイブ												

※申込人数が5名以上の場合は、この申込書をご一の上で利用下さい

申し込み日 月 日 () 変更日 月 日 () 取消日 月 日 ()

変更日 月 日 ()	取消日 月 日 ()
-------------	-------------

お預かりいただいた個人情報は「個人情報保護法」に基づき、漏洩・不正利用・改ざんなどのないよう適切な管理に努めます。
また、当社は大会会場や旅行手配に必要な範囲内で大会事務局にお客様の個人情報と共有して利用いたします。お預かりした個人情報については、必要な保存期間終了後廃棄に消去いたします。

営業時間：平日 9:30～17:30
（土曜・日曜・祝日休業）

【配付物類】 手話通訳や車いすの有無などご記入ください。

9月6日(土)

プログラム

全体会／10:00～14:10

9:00	受付開始
10:00	開会式 主催者挨拶・来賓挨拶
10:30	行政説明 厚生労働省
10:50	 基調講演 人と人との対話が拓く 精神保健医療福祉のこれから 講師：高木 俊介氏／たかぎクリニック院長
11:50	昼休憩(50分)
12:40	全国家族会結成60周年記念リレートーク 座長：佐藤 純氏／Caféきょうと代表
13:40	活動報告 みんなねっと理事長 岡田 久美子
13:55	全体会修了式 大会宣言・次回開催地紹介
14:10	休憩・移動

分科会／14:25～16:40

14:25	第1分科会 親亡き後をみすえた家族まるごと支援 座長：塩満 卓氏／佛教大学教授
	第2分科会 なかなか支援につながらない本人と 家族のまるごと支援 座長：松田 美枝氏／京都文教大学教授
	第3分科会 精神的にしんどい親と子の 家族まるごと支援～ヤングケアラー 座長：田野中 恭子氏／佛教大学准教授
	第4分科会 交通運賃割引の取り組みについて 座長：新銀 輝子氏／JRなど交通運賃推進プロジェクト座長
16:40	閉会 各分科会でまとめ・終わりの挨拶

9月5日(金)

プレイベント 前日交流会

1部／15:30～17:30

場所

京都テルサ
東館3階大会議室

テーマに沿って
交流するイベント

内容

家族会員交流会
参加費／無料

定員
70名

2部／18:30～20:00

場所

都ホテル京都八条

内容

懇親会

参加費1人／8,500円

定員
240名

第17回全国精神保健福祉家族大会in京都

みんなねっと京都大会

参加申し込み及び支払い方法について

申込開始日 2025年7月1日(火) 10:00より

区分	日時	参加費	申込方法	支払方法
大会(全体会・分科会) 会場参加	9/6(土)	3,000円 (家族・一般)	URL https://sec.tobutoptours.co.jp/web/evt/seishinhoken2025/ QRコード  FAX 075-341-1878	銀行振込 もしくは クレジットカード
アーカイブ視聴 のみ	11/1(土)～ (予定)	1,000円 (当事者・学生)		
前日交流会 1部(交流会) ※定員70名	9/5(金) 15:30～17:30	無 料		
前日交流会 2部(懇親会) ※定員240名	9/5(金) 18:30～20:00	8,500円		

チケットの問合せ先は 東武トップツアーズ(株) 京都支店 050-9001-8771

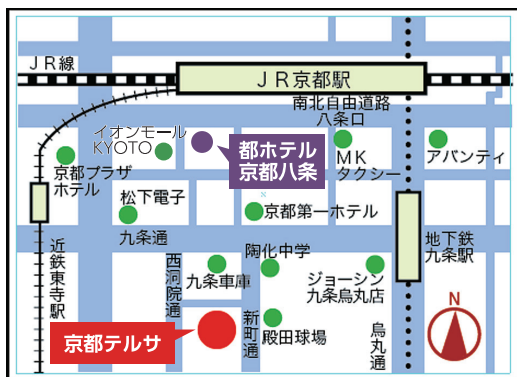
全体会、分科会、前日交流会の参加は事前登録制です。

会場都合等でご希望に添えない場合がございます。

お弁当、ご宿泊につきましても上記よりお申込みください。

▶会場参加の方は追加費用なしでアーカイブ配信の視聴ができます。

申込締切日 2025年7月31日(木) 23:59まで



京都テルサへのアクセス

- JR京都駅(八条口西口)より南へ徒歩15分
- 近鉄東寺駅より東へ徒歩5分
- 地下鉄九条駅4番出口より西へ徒歩5分
- 市バス九条車庫南へすぐ

お問い合わせ

(公社)京都精神保健福祉推進家族会連合会

〒604-8804 京都市中京区壬生坊城町48-6

京都社会福祉会館3F

TEL:075-384-0296

E-mail:kyokaren@luck.ocn.ne.jp